

日本労働社会学会『通信』20期第5号(2008年10月)

日本労働社会学会事務局(第20期)

〒432-8021 静岡県浜松市中区城北3-5-1

静岡大学情報学部 笹原 恵(ささはらめぐみ)

Tel./Fax.053-478-1532 E-mail:sasahara@inf.shizuoka.ac.jp

学会 HP:<http://www.jals.jp>

会費納入 恐れ入りますが学会費の納入は、現金書留ではなく、下記の口座までお願いします。なお、大会時にも徴収しますので、大会参加なさる方はご準備をお願いします。

【郵便振替口座】口座番号：00150-1-85076 加入者名：日本労働社会学会

【銀行振込口座】三菱東京UFJ銀行 浜田山出張所

口座番号：普通預金 0411742 口座名：日本労働社会学会 榎本環

年会費 学生・院生会員 6000円 / 一般会員 10000円

早くも学会大会開催が来週になりました。今期最後の通信、学会大会案内特集号をお送りします。東京での開催のせいか、はがきでの大会参加申込みがあまり多くなかったようです。大会開催校のご好意で、ぎりぎりまで参加申込みをお受けするという事ですので、ぜひお出かけください。

今後の日程：

第20回大会 工場見学：2008年10月24日(金)14時~17時

テクノWING(正式名称：大田区立本羽田二丁目第二工場 アパート)

学会大会：10月25日(土)-26日(日)専修大学(東京都千代田区神田)

ブラヴォイ研究会：11月24日(月、休日)12時~14時半

(カリフォルニア大学パークレ校、マイケル・ブラヴォイ教授を囲む研究会)

於：明治大学駿河台研究棟会議室 詳細は幹事会報告をご覧ください。

主催：日本労働社会学会、一橋大学フェアレイバー研究教育センター、

法政大学大原社会問題研究所、明治大学労働教育メディア研究センター

目次

- .日本労働社会学会第20回大会申し込みについて(最終)
- .日本労働社会学会第20回大会プログラム
- .7月関西研究例会報告(関西：2008年7月5日)

- . 日本労働社会学会第 5 回幹事会議事録 (9 月 6 日)
- . 幹事の交代について (総会で選挙があります)
- . 会員の異動について

. 日本労働社会学会第 20 回大会申し込みについて (最終)

学会大会申し込みをまだなされていない方で、参加を予定していらっしゃる方がいらっしゃいましたら、至急、大会担当幹事 (専修大学、樋口博美) までご連絡をお願いします。大会開催校のご好意で 10 月 20 日 (月) まで申し込みを延長して下さることになりました。

申し込まれる方はメールで下記の事項についてお知らせください。

樋口博美 "Higuchi Hiromi" han_thh@ybb.ne.jp

- * お名前 / 御所属 / 会員・非会員の別 / 一般・院生の別
- * 大会参加 (大会 1 日目のみ、2 日目のみ、両日とも)
- * 昼食 (25 日のみ、26 日のみ、両日とも) が必要か不要か
お弁当代は、ペットボトルのお茶付きで一食 1000 円です。
- * 懇親会 (25 日) の出席の有無 懇親会費は一般 5,000 円、大学院生・学部生 3,000 円

. 日本労働社会学会第 20 回大会プログラム

日時： 2008 年 10 月 24 日 (金) ~ 26 日 (日)

第 1 日 10 月 24 日 (金) 工場見学：テクノ WING

(正式名称：大田区立本羽田二丁目第二工場 アパート)

13 : 30 京浜急行空港線糀谷駅集合

14 : 00 工場見学

17 : 00 現地解散

18 : 30 幹事会 (専修大学神田校舎 1 号館 1 2 階社会科学研究所分室)

第 2 日 10 月 25 日 (土) 自由論題報告 (校舎棟 1 号館 2 階 2 0 5 教室)

10 : 00 ~ 11 : 45 自由論題報告 : 労使関係の展開と模索

11 : 45 ~ 14 : 00 総会 (昼食含む)

14 : 00 ~ 17 : 15 自由論題報告 : 労働世界とアイデンティティ (途中休憩を含む)

18 : 00 ~ 20 : 00 懇親会 (校舎棟 1 号館 1 5 階ホール)

第 3 日 10 月 26 日 (日) シンポジウム (校舎棟 1 号館 2 階 2 0 5 教室)

10 : 00 ~ 11 : 50 シンポジウム開催にあたって / シンポジスト報告

11 : 50 ~ 13 : 00 昼食・休憩

13 : 00 ~ 14 : 30 シンポジスト報告

休 憩

14 : 30 ~ 16 : 30 総括討論 (コメント・リプライを含む)

大会 1 日目：

10 月 24 日(金) 工場見学 14 時～17 時まで 担当：吉田誠幹事

集合：13 時 30 分、集合場所：京浜急行空港線糀谷駅

14：00 工場見学 17：00 現地解散

工場見学予定者の方で急の欠席などご連絡がありましたら、労働社会学会事務局：

笹原までご連絡ください(090-7033-6081 笹原)

<工場見学>

見学先：テクノ WING (正式名称：大田区立本羽田二丁目第二工場 アパート)

テクノ WING 大田は、日本のものづくりを支える大田区の基本的技術産業の維持と発展、産業集積の活性化をめざし、産業と生活が共存する街づくりを進める「住工調和環境整備事業」の一環として大田区が建設した工場アパートです。開放型の広場を含む約 6,500m²の敷地には、工場棟と職住近接のための入居者企業用住宅(ウイングハイツ)を併設。工場棟は 5 階建てのビルに 48 の工場ユニットを擁する首都圏最大級のもので、都市に置ける産業立地環境整備のモデルケースとして位置づけられています

詳しくは <http://www.techno-wing.net/> をご覧ください。

<幹事会> 18：30～ 専修大学神田校舎 1 号館 1 2 階社会科学研究所分室

大会 2 日目 10 月 25 日(土) 校舎棟 1 号館 2 階 205 教室

(報告 25 分と質疑 15 分、各々 40 分)

1. 自由論題報告 : 労使関係の展開と模索 10：00～12：00
司会 高木朋代(敬愛大学)
 - 1) 10：00～10：40 「若者の労働運動」 首都圏青年ユニオンの事例研究
橋口 昌治(立命館大学 先端総合学術研究科)
 - 2) 10：40～11：20 企業・社員間の関係変化について：紛争調整の視点から
野瀬 正治(関西学院大学 社会学部)
 - 3) 11：20～12：00 新たな労働組合像、されど「我々と奴ら」
ベルギー日系企業における労働組合を通して
大久保 鞠(International School)
2. 総会(昼食を含む) 12：00～14：00
3. 自由論題報告 : 労働世界とアイデンティティ 14：00～17：00
司会 櫻井純理(大阪地方自治研究センター)
大槻奈巳(聖心女子大学)
 - 1) 14：00～14：40 自転車メッセンジャーの労働世界

神野 賢二 (一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

2) 14:40~15:20 ケア労働の特質に関する社会学的考察

永井隆雄 (九州大学大学院経済学府 / LEC 大学講師)

休憩 (20分)

3) 15:40~16:20 女性教職員のキャリア志向とジェンダー意識

高島 裕美 (北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程)

4) 16:20~17:00 中国の大学生の就職意識と就職活動

徐 亜文 (広島国際学院大学 非常勤講師)

4. 懇親会 (校舎棟1号館15階ホール) 18:00-20:00

大会第3日 10月26日(日) 校舎棟1号館2階205教室

(報告は各45分)

1. シンポジウム 10:00~14:30 (昼休み含む)

「労働者像のこの10年 市場指向と社会指向の相克のなかで」

司会 中川功 (拓殖大学) 筒井美紀 (京都女子大学)

10:00~10:20 シンポジウム開催にあたって 労働の再編成と市場指向・社会指向
藤田栄史 (名古屋市立大学)

10:20~11:05 第1報告 「もうひとつの企業社会論 小集団運動とその周辺」
小川慎一 (横浜国立大学)

11:05~11:50 第2報告 「成果主義賃金・労働市場の外部化と日本的雇用慣行」
神谷拓平 (茨城大学)

昼食・休憩 (11:50~13:00)

13:00~13:45 第3報告 「日本の労働運動の再活性化の可能性について：
再活性化「必然性」論の視角からの考察」

鈴木 玲 (法政大学大原社会問題研究所)

13:45~14:30 第4報告 「ジェンダーと労働の再編成」
村尾 祐美子 (東洋大学)

休憩 (14:30~14:45)

2. コメント 14:45~15:15

コメンテーター 林 大樹 (一橋大学)・ 清山 玲 (茨城大学)

3. 総括討論 (コメントへのリプライ含む) 15:15~16:30

=====

大会開催校： 専修大学 〒101-8425 東京都千代田区神田神保町 3-8

大学ホームページアドレス <http://www.senshu-u.ac.jp/index.html>

大会担当幹事： 樋口博美、柴田弘捷

【交通手段】 神田キャンパスへのアクセス

http://www.senshu-u.ac.jp/univguide/campus_info/campus_info_index.html

水道橋駅（JR）西口より徒歩 7 分

九段下駅（地下鉄ノ東西線、都営新宿線、半蔵門線）出口 5 より徒歩 3 分

神保町駅（地下鉄ノ都営三田線、都営新宿線、半蔵門線）出口 A2 より徒歩 3 分

【大会参加費】 会員（一般・大学院生）2,000 円

非会員（一般）2,500 円、非会員（大学院生・学生）2,000 円

大会開催校（専修大学）の大学院生・学部生は無料。

【懇親会参加費】一般会員 5,000 円、大学院生・学部生 3,000 円

【学会費】一般会員 10,000 円、大学院生・学部生 6,000 円

（シニア会員会費につきましては、今回の総会で決定されますので、総会決定後にア
ウンスさせていただきます）

7 月関西研究例会報告（関西：2008 年 7 月 5 日）

関西地区担当 吉田秀和

第 13 回関西労働社会学研究会を以下のように行いました。

日 時 2008 年 7 月 5 日（土） 午後 1 時 30 分～ 5 時

会 場 佛教大学 11 号館 2 階会議室

当日は、報告者 1 名を含めて 4 名のご参加とコンパクトではありましたが、その分ゆっ
たりとした時間のなか活発な議論を交わせた研究会となりました。

西田報告「定年退職者のキャリアから見るボランティア活動の実態 「定年宿」という
考え方」は、定年退職者たちによるボランティア活動が彼らに定年退職以降も就労期と
は異なる形態で積極的に社会参加の機会を与えるものとして捉えつつ、キャリアの異なる
定年退職者たちを地域リーダーとして育成する退職者支援の講座が前キャリアをリセット
する役割を担っていることに着目して、同講座を「若者宿」にヒントを得た「定年宿」と
して捉え直し、その実態を量的・質的データの分析を通じて報告されていました。

また、この研究会での報告者を募集しておりますので、関心のあるかたは高橋伸一
（takashin07@bukkyo-u.ac.jp）もしくは吉田秀和（h-yosida@soc.ryukoku.ac.jp）までご
連絡ください。（次回の研究会は 2008 年 12 月ごろを予定しています。）

定年退職者のキャリアから見るボランティア活動の実態

「定年宿」という考え方

滋賀県立大学人間看護学部 西田厚子

近年、定年退職者（以下、退職者）たちのボランティア活動は定年退職（以下、退職）後の生活設計の選択肢の一つとして、また地域福祉の新たな資源として注目を集めている。今回の報告は前者の立場にたち、退職者たちの生活の再構築に焦点をあてた質的研究である。

また、高齢者研究からみれば、急速な高齢化が進展する日本社会の退職者像は「多様性」をキーワードとする見方が支配的である。たしかに、私たちが少し関心を払ってみると退職者にとってさまざまな社会活動の場が準備されているようであり、そこで活動している退職者は少なからず存在する。かつての「濡れ落ち葉」と称された退職者たちはもはや過去の遺物であるという見方も成り立ちうる。このこと自体は当事者である退職者にとっても喜ばしいことのようにも語られている。

とはいえ、日本の退職者のボランティア活動は欧米に比べれば日が浅く、まだ新しい試みの段階といえよう。さらに、このような現状であるにもかかわらず、日本における急速な高齢化の進展は欧米に例をみず、工業化の進んだ社会において長い老後での生活の再設計の先行モデルはほとんどない状況である。

こうした社会背景のもとで、退職者は老後生活の入り口に位置する退職を契機に自己の存在をどのようにして意味づけようとするのであろうか。「多様」な社会活動に取り組む彼らはいかなる苦悩も抱えてはいないのだろうか。

これらの問いを明らかにするために、本報告は現代の日本社会において退職後の生活がドラマティックに変化したと考えられる男性退職者たちを事例として見出し、それら一連の分析をまとめたものである。とくに、本報告では退職者個人が集団活動をとおして生活を再構築する過程に注目し、そこでの退職者個人と集団との相互作用を検討した。

ここでことわっておきたいことは、本報告は定年退職者の代表的な事例を扱っているのではなく、また事例から定年退職者の全体像を論ずるのでもない。むしろ、退職後の生活の再構築をなしえたと思定される事例を分析したものである。

今回の報告は2001年から開始している3つの調査研究からなる。調査 は行政による退職者支援活動の比較分析である。先行調査をもとに全国的にみていくつかの事例を教育目的、内容から検討し、退職者の生活の再構築を図ることを目的とする事例を見出した。ここでは仮にA講座と称しておこう。

調査 は、調査 で見出したA講座およびその同窓会組織の事例分析である。A講座は2年間の受講期間にもかかわらず、受講希望者が2倍以上という好評な講座であり、現在、約2千人の同窓会員を抱えている。

A講座は、他の支援プログラムに比して、その教育目標、プログラムの選択制にその特徴

がある。では、こうした支援プログラムを受講した人びとは社会活動に参加し退職後の生活を立て直しているのだろうか、再構築しているとするならばそこにはいかなる相互作用が生じているのであろうか。受講者たちの再構築のプロセスを詳細に検討するため、受講者が中心的メンバーとなって設立した B グループを選定し、グループへのインタビュー調査を実施したものが調査 である。

調査 は、B グループへのインタビュー調査に加え、関連する資料分析、例会への参加観察をもとにしてその活動の特徴を分析したものである。

また、調査 と調査 で取り上げる事例の地域の概要は次のとおりである。対象地域はかつて農村社会であったが、高度経済成長期に大手の製造業が進出したために現在では工業を中心とした地域経済へと変貌しつつある。そのため、県民 1 人あたりの県民所得は全国的にみて高い値を示す。また、京阪神のベッドタウンとしても開発が進み、人口増加率、総住宅総数の増加率はともに全国でも上位に位置する地域である。

紙幅の関係からここでは調査 と調査 の分析結果を中心に述べておきたい。第一に、A 講座と B グループにおける相互作用では、身分はく奪の儀礼、平等性の確保、年齢階梯制の存在、などの特徴がみられた。グループの平等性と年齢階梯制には、退職者たちの都市的な性格よりも、むしろ対象地域の農村社会による影響が大きいと考えられる。また、これらの特徴は彼らの仲間意識を強固なものにし、秩序づけ、安定的なグループの運営および会員の拡大に役立っていた。

第二に、B グループは退職という社会的な地位からの分離からボランティアとして再統合する儀礼としての意味をもつことである。たとえば、彼らは再統合としてのシンボルとシンボリックな行為により、メンバーをグループに位置付けることに成功していた。入会者たちは、グループ内での一定期間をへてボランティアという社会的な役割を取得する。

このような B グループの特徴は、伝統社会におけるリミニリティの特徴を有する企業社会から市民社会へとむかうための一時的な状態であり、「定年宿」とでもいうべき事例である。しかし、伝統社会のそれが共同体において新たな社会的地位を与えたことに対して、今回の事例は、長い老後にむかうための限定されたなかでの通過儀礼ともいえる危うさを孕む。そこに、わたしたちは、伝統社会にみられた共同体を喪失した産業社会の儀礼もつ特徴を見いだすのである。

西田厚子氏「定年退職者のキャリアから見るボランティア活動の実態 「定年宿」という考え方」へのコメント

龍谷大学社会学部 吉田秀和

西田報告は、定年退職後における社会参加の一形態としてボランティア活動を位置づけ、その実態を 3 つの調査の分析を通してかつての儀礼集団「若者宿」にヒントを得た「定年宿」を提案したものであった。周知のように 2007 年以降に本格化してきた団塊世代の定年

退職、長寿高齢化社会のさらなる進行、高齢期におけるライフコースの多様化を背景として、定年退職者のその後の動向はすでに多方面からアプローチが試みられているところであるが、同報告はその一つといえる。

報告の内容は、行政による退職者支援活動について広域行政別の比較分析、さらに S 県での支援講座の詳細、同講座の同窓会メンバーによる活動のケーススタディであった。そのなかで定年退職者の社会参加モデルとして同講座の同窓会メンバーによるボランティアグループが報告された。

報告によれば、定年退職者の社会参加支援としての同講座は、社会福祉協議会主催の老人大学校（生涯学習事業）で開講されたのがその出発点であり、その後の長寿社会対策により変遷はあるもののおおよそ 30 年間に 3800 名が卒業、2008 年時点で同窓会会員はおおよそ 2000 名を数えている。講座には定員枠があるため受講生は作文とその他の出願書類により選考されており、昨年場合は定員のおおよそ 2.5 倍を超える応募があった。講座の狙いは、定年退職者に対して地域活動への参加を促すことを目的とする。受講期間は 2 年間、講座の主な内容は、地域人として自己変革や地域リーダーとなりたいと望む人に対する知識や教養に関するものであり必修講座（人間理解、郷土理解、社会参加、学校行事）と選択講座から構成されている。そのなかでも職業キャリアをその後の活動に持ち込まないことを学びセット講座があり、それが実際の活動にどのように作用しているのかに興味注がれた。

すでに同窓生が主要メンバーとなった地域ボランティア活動グループが複数あり、定年退職後の生活の再構成に成功している男性中心のグループが報告対象であった。同グループは、2002 年 12 名のメンバーで活動開始、2008 年現在メンバーはおおよそ 40 名となり、会長 1 名を筆頭に副会長 2 名のもとに 4 つの分野（土グループ、PC グループ、人グループ、大工グループ）のボランティアグループが活動している。メンバーはそれぞれの得意とする活動分野のグループに所属している。

ここで、グループ内の役割分担と前キャリアとの関連性についてであるが、同組織は「例会での集団討議による決定方式」を採用し、「経験を活かすこと」の意味を踏まえつつ「肩書きをいわない暗黙のルール」によって運営されており、形式上は組織内部での平等性と階層性を保っている。しかしながら、当然の成り行き言えるのであろうが、実質的な運営はホワイトカラーの人事管理経験者が担当しており、ブルーカラー経験者がそのポジションには就いていない。「経験を活かすこと」ということから、そのことへのメンバーも理解があることも確かであり、職業キャリアをフォーマルに出す人間関係は表面上は見えてこないが、実質的には退職前キャリアを活かした役割分担となっている。ここにグループ内で暗黙の了解が機能している。これらがスムーズに機能しているのは、同グループの活動が、地元メディアで紹介されていることや行政との協力関係を構築していることなど同活動に対する社会的認知がメンバーの励みとなって点があげられていた。また、それがモデルケースとして報告された所以である。

今回の西田報告は、「濡れ落ち葉」とよばれる退職後の男性に社会参加の機会をもたらす行政支援事業の実態分析であった。報告事例は退職後埋もれがちな男性参加の機会を与えたモデル的活動といえよう。その特徴は、受講費や時間など経済的にも時間的にも日常生活に余裕のある退職者であることであり、同窓生メンバーはそもそも選考試験(作文)や2年間の講座履修を終えていることなど篩と高いハードルを乗り越えきたかなり限定されたメンバー構成であったといえる。欲を言えば、成功事例だけでなく表立って出てこない失敗事例から学ぶべき点の指摘もほしかった。

質疑の中で語られたものとして、就労前に購入した自社株を退職後も持ち続け、退職後においてもなお元勤務先の営業活動の一端を担っていることなど退職後も元勤務先との繋がりを持ち続ける日本の特質についての指摘など興味深い点も多くあった。定年退職後における余生が伸長し続ける時代にあって、キャリアと退職後の社会参加の分析に研究テーマをもっている同研究に今後とも注目と期待をしている。

・日本労働社会学会第5回幹事会議事録(9月6日)

第20期 日本労働社会学会 第5回幹事会議事録

2008年9月6日(土) 午後12時半～2時半

拓殖大学文京キャンパス C館504教室

出席者：藤田栄史、秋元樹、赤堀正成、榎本環、大重光太郎、神谷拓平、柴田弘捷、筒井美紀、中川功、樋口博美、古田睦美、吉田誠、笹原恵、

欠席者 大野威、河西宏祐、木下武男、京谷栄二、中園桐代、吉田秀和、武居秀樹(休会中)
(順不同、敬称略)

議題) 1 研究委員会関係

(研究大会について)

*大会事務局(専修大学)から

柴田、樋口大会担当幹事から、大会会場が神田校舎の一号館2階に決まったことと、部屋を3部屋用意した旨の報告があった(報告会場、会員控え室、幹事会開催)。工場見学後の幹事会(24日)は、同じ建物の12階の社会学研究室を用いる予定。

このほか、タイムキーパー、受付などには大会開催校で学生アルバイトを雇用する用意があり、会費徴収やバックナンバー販売についてもこれとは別にアルバイト学生を依頼してくださいということであった(会費徴収・バックナンバー販売の責任者は、榎本会計担当幹事と笹原事務局長)。また自由報告は、1報告25分+5分質疑であることも確認された。

*自由報告について

中川研究担当幹事から、自由報告の内容と順番等についての紹介・提案があり、種々議論した結果、午前3本、午後5本として、3部構成になることが決定された。司会者などの具体案については研究委員会で検討し、依頼することになった。

***シンポジウムについて**

神谷研究担当幹事からシンポジウムについて報告があった。幹事会后に、シンポジストの報告・打ち合わせが予定されていることから、進行等についてはその時に詰めることになった。

***総会について（総会議事案あり）**

笹原事務局長から総会議事（案）について説明があり、委員会の報告事項等総会の流れについて確認を行った。今回の総会では、次期幹事の選出があることも確認した（事務局報告参照）

***工場見学について**

工場見学について下記の事項を確認した。なお吉田誠担当幹事からまだ参加申し込みが定員に達していないことが紹介され、速報等で再度参加希望者を募ることになった。

日時：2008年10月24日（金）14時～17時まで

集合日時：13時30分集合

集合場所：京浜急行空港線糞谷駅

見学先：テクノWING（正式名称：大田区立本羽田二丁目第二工場 アパート）

***奨励賞関係 / 業績配信制度**

奨励賞選考委員については、すでに藤井史朗会員に依頼済みだが、あと二名については手違いが生じており、未定になっていることが報告された。至急、依頼する予定であるということであった。ただし今回は候補作がゼロであるため、該当者なしとなる見通しである。当学会は規模の小さい学会なので、毎年、奨励賞を出すのは難しいことから、たとえば審査期間を現在の1年から2年にする、あるいは論文についての推薦が出にくいことから、業績配信制度などを用いて一定数の論文登録をしてもらい、たとえば幹事会内に推薦母体となるグループをつくり幹事会推薦という形をとるなどの工夫が必要ではないかという意見が出された。今後、改めて「奨励賞規定」の改定案を提出する予定である。

2 年報編集委員会から

赤堀年報編集委員会から、編集の現況についての報告があった。まだ原稿がでそろっていないことから研究大会には間に合わないが、鋭意、編集にあたっているということであった。

3 ジャーナル編集委員会から

大重ジャーナル編集委員長から、現在、編集中のジャーナルの進行状況について報告が

あった。一次査読の締め切りが8月末日であり、現時点で投稿論文8本すべてに対する査読所感が出そろっており、今後は、査読所感をもとに編集委員会で個々の論文の今後の扱いについて検討し判断する予定である。なお、査読に協力した会員への謝辞が述べられた。

4 労働調査プロジェクト

河西・秋元労働調査プロジェクト担当幹事から、前期の幹事会までの経過、今期の幹事会のもとでの経過をふまえたうえで、2007年12月の幹事会、2008年3月の幹事会での決定事項について説明・確認があった。現時点では、今後の運営については、代表幹事と担当幹事が打ち合わせをしたうえですすめること、必ずしも出版を目的とせず、学会内研究グループ(若手中心)の組織化を目的とすることも考えられ、その場合には、もう少し小さいテーマを設定することも可能であること、次期幹事会の中に「労働調査プロジェクト」を設置していただき、現幹事の中で次期幹事に残る方に世話人を依頼すること、が決定されていることを確認した。

5 会計

榎本会計担当幹事から、7月幹事会での決定に基づき、「シニア会員」および「常勤職にない会員の会費減免措置」について、大会開催期間中の学会誌バックナンバーの在庫処分・割引販売についての提案がなされ、幹事会として異議なく承認された。なおの点については総会での承認を要するので、改めて総会で提案・決定される予定である。

「シニア会員」(概要)(会費金額8000円、申請資格「定年退職後、定職をもたない会員。ただし「定年」については準ずるものを含む)、会員からの自己申告に基づき、幹事会で検討・承認する。申請年度以降の会費について適応するなど)

「常勤職にない会員の会費減免措置について」(概要)

(会費金額6000円<学生会員と同額>、申請資格<以下の二点を満たしていること>、1)大学院を修了/退学していること、2)申請年度の10月1日時点で常勤職についていないこと、なお任期制職員はこれに含まない、本人からの自己申告により幹事会で検討・承認する。申請年度のみ会費について適用するので、毎年申請手続きを行ってもらう)

6 社会学系コンソーシアムおよび社会政策関連学会協議会設立準備委員会関係

藤田代表幹事から社会学系コンソーシアムおよび社会政策関連学会協議会設立準備委員会についての説明があった。社会学系コンソーシアムについては、昨年度の総会で当学会としての参加が決定しており、コンソーシアム規約についての修正意見等を集約したうえで、8月中旬に連合体申請をしているはずである。社会政策関連協議会は7月末に発足し、当学会としては現在はオブザーバーという形で参加している。次の総会で正式な参加を承認してもらった後、協議会の正式メンバーとなる予定である。なお、社会学系コンソーシ

アムでは当学会の会費（分担）は1万円であること（300人以下の学会）、おそらく社会政策関連学会でも同程度の負担となることが紹介された。

7 ブラヴォイ研究会について

京谷幹事からの「ブラヴォイ研究会」開催についての連絡文書の紹介があり、幹事会として異議なくこれを承認した。

カリフォルニア大学バークレー校、マイケル・ブラウォイ教授を囲む研究会の開催

開催日時：11月24日（月） 12時～14時半

開催場所：明治大学駿河台研究棟会議室（参加者50名余を予定）

1) 主催について

日本労働社会学会と一橋大学フェアレイバー研究教育センター、法政大学大原社会問題研究所、明治大学労働教育メディア研究センターとの共催。労働社会学会、フェアレイバー、大原社研は講演料を支出（1組織2万円程度か）。労働教育メディアは会議の場所を提供。

2) 講演の内容

ブラウォイ教授の40年にわたる労働研究の推移から、社会学者の社会運動への関与を主張する最近のpublic sociologyへの展開、および市場万能の今日における労働研究の意義と可能性を論じてもらう。（内容については8月13日にバークレーのブラウォイ教授の研究室にて京谷が話し合ったが、会員等の要望を聞きながら今後さらに教授との間で調整を進める。）

当日の司会進行は京谷、報告内容の要約と説明は鈴木玲会員が担当。（同時通訳ではない。）

3) 出版について

ブラウォイ教授の講演内容と討論を『日本労働社会学会年報』（2009年）において出版する。これについては、次期編集委員会への引継ぎが必要。また、テープ起し、翻訳などの経費がかかる。

注：研究会終了後ブラウォイ教授がすぐに成田に向かわねばならないので、時間が非常に厳しい。したがって12時には教授の講演が開始できるように準備する必要がある。当日ブラウォイ教授は仙台から移動。京谷と木本会員が同行し、11時頃東京到着の予定。

8 事務局から

笹原事務局担当幹事（事務局長）から下記の報告があった。

1) 研究大会総会について（前掲、済）

2) 新幹事の選出について

今期の幹事会の任期が9月一杯で終了するため（運用上の任期は大会時まで）、次回の総会の時に幹事の選出（選挙）が開催される旨の報告があり、現幹事で次回も引き続き幹事

として立候補することの確認や選出に関する細則の確認がなされた。現細則では、候補者数が幹事定員と同数の場合にも3名連記方式になっていることから、信任方式でよいのではないかという提案がなされ、次回幹事会・総会までに事務局が細則変更案を準備することになった。なお新幹事の推薦等についての話題も出された。

3) 入会承認 2人の方の入会が承認された

橋口昌治(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

研究領域 若年非正規労働者を中心とした労働組合運動

紹介者 藤田栄史(代表幹事)

村田晶子(コロンビア大学ティーチャーズスクール教育人類学プログラム博士課程在籍)

(修士 2008年6月終了)

研究領域 教育人類学 日本における外国人留 学生の就職問題

紹介者 笹原 恵(事務局)

4) 退会 3人の方の退会が報告された。

横山 知玄(松山大学、7月14日付)

滝下 幸栄(京都府立大学、8月9日付)

藤本 昌代(同志社大学、9月4日付)

5) 次回の幹事会 10月24日(金)工場見学終了後 6:30~

今期最後の幹事会なので、終了後、懇親会を行う。

(文責: 笹原)

・ 幹事の交代について(総会で選挙があります)

第20回学会大会時に開催される総会において、幹事の選挙があります。

本学会の役員につきましては、「日本労働社会学会会則」および「日本社会学会役員選出に関する細則」で下記のように定められています。

自薦、他薦に関わらず、幹事に立候補なさる方は、大会時の幹事会(10月24日)までに代表幹事(藤田)および事務局(笹原)まで、立候補なさる旨をお伝えください。原理的には幹事会(10月24日夕方)までの立候補が可能ですが、諸準備の都合上、できれば大会前日の10月23日までにご連絡をいただくと幸いです。

藤田 fujita@hum.nagoya-cu.ac.jp

笹原 sasahara@inf.shizuoka.ac.jp

「日本労働社会学会会則」

[役員]

第9条 本会に、つぎの役員をおく。

(1) 代表幹事 1名

